様式1

令和7年度　山梨県立韮崎高等学校(全日制)評価報告書（自己評価・学校関係者評価）

学校目標・経営方針	「人間を育てる」

山梨県立韮崎高等学校校長　小笠原　宏

本年度の重点目標	
	「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な実現を図り、確かな学力の育成に努める。
	他機関と連携した教育活動を通じて生徒の人間性の育成に努める。
	すべての教育活動を通じて、たくましく、しなやかな心をもった生徒の育成に努める。

達成度		
	A	ほぼ達成できた。（8割以上）
	B	概ね達成できた。（6割以上）
	C	不十分である。（4割以上）
	D	達成できなかった。（4割以下）

評価		
	4	良くできている。
	3	できている。
	2	あまりできていない。
	1	できていない。

自　己　評　価

本年度の重点目標				年度末評価（ 1月14日現在）			学校関係者評価 実施日 （令和8年2月12日）	
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	自己評価結果	達成度	成果と次年度への課題・改善策	評価	意見・要望等
1	確かな学力の育成	「主体的・対話的で深い学び」を念頭に置いた授業改善と、少人数教育・習熟度別教育を生かした学びを実践する。 観点別評価の適切な運用をさらに工夫し、指導の効果や効率を高める。 ICT教育を充実させ、情報活用能力を育成する。	学校評価アンケート 授業アンケート 学校評価アンケート 学校評価アンケート 授業アンケート	・教員のほぼ全員が基礎学力の定着や授業改善を意識しており、生徒の9割が主体的な取り組みや対話が「深い学び」につながっていると肯定的に捉えている。 ・観点別評価の適切な運用に、ほぼ全員の教員が意識して取り組み、根拠に基づいた評価に努めている。また、評価のつけ方について生徒の8割以上が妥当だと感じている。 ・授業や探究活動にICT機器を教員が積極的に取り入れており、生徒・保護者も肯定的に評価している。	A	ICT活用の質をさらに高めるとともに、個々の教員による授業の分かりやすさを底上げしていく。 ・教科間での実践共有と観点別評価の運用の更なる改善を行う。 ・Teams等のICT機器を活用した「学習支援が学びのツールとして定着しているが、ネットワーク環境の改善も課題である。	3	・ICTの活用については、探究活動や問題解決の手段として定着しつつあり評価できる。今後はさらにAIとアナログを組み合わせた人間らしい解決策の模索や、情報リテラシーの育成が期待される。・部活動と学業の両立による生徒・教員の負担感は「限界に近い」との指摘がある。持続可能な教育のための「バランスの最適化」が強く求められる。・学習面では、主体的な学びが質の高い学力育成に繋がっているとの評価がある一方、テスト範囲の提示時期の改善などの具体的な要望も上がっている。・SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）事業による魅力的な講師陣や、鹿児島での科学研修などは、生徒の興味を喚起し、身近な自然や地質への関心を高める素晴らしい取り組みである。・ICT等の新しいツールを積極的に取り入れつつも、過度な負担を軽減し、より効果的な学習体制を構築することが今後の課題である。
2	生徒の人間性の育成	生徒が主体的に学び考える課題研究を推進する。 あらゆる教育活動を通じて、社会に目を向ける意識を育成する。 地域の小中学生や県内大学、海外姉妹校等との連携活動を実施する。	学校評価アンケート 授業アンケート 学校評価アンケート 事後アンケート 学校評価アンケート 公開講座等への参加者数	・教科横断的な課題研究や学習活動が継続し、生徒の主体性・対話的学びを促進しており、生徒から高い肯定的評価が得られた。 ・地域の園、小中学校、大学等との連携活動を展開し、社会に目を向ける意識の醸成に一定の成果があった。 ・今年度は海外姉妹校への短期留学の実施年度であるため、十分な準備を行っている。	B	・教科横断的な取り組みを強化し課題研究のより一層の質向上を図り、発表機会を充実させていく。 ・地域の異校種の学校等との交流や連携を今後も継続していく。 ・連携事業の周知を徹底し、より多くの生徒の参加を促すとともに、、活動成果を学習へ還元する仕組みの整備を検討する。	3	・学校全体の「安心感」と地域社会との連携が高く評価できる。・教員が生徒一人ひとりを大切に見守る姿勢が、保護者からの信頼と学校全体の安定感に繋がっている。・地域と連携した活動やボランティアは、生徒が社会との繋がりを意識し、郷土愛や他者への敬意を育む貴重な機会となっている。・学校側は地域連携に成果を感じているものの、生徒アンケートでは「あまり思わない」との回答が3割あり、学校と生徒の認識の乖離が見られる。・校内ルールに疑問を持つような主体性のある生徒に対し、対話やコミュニケーションの機会を設ける必要性がある。・挨拶の励行などの日常的な指導は定着しており、生徒は概ね落ち着いた態度で過ごしているが、今後はさらに生徒が自律的なリーダーとして成長できるよう、組織的な支援を強化することが期待される。
3	たくましく、しなやかな心をもった生徒の育成	部活動を計画的に行い、生徒の心身の健全な育成と学校の活性化に努める。 交通安全意識や防災対応能力を高める取り組みを通して自他の生命を尊重する心を養う。 部活動や学校行事等を通して成就感や達成感を得させ、自己肯定感を高める。	学校評価アンケート 各種大会の結果、部活動への参加率 学校評価アンケート 交通事故・違反統計 学校評価アンケート 事後アンケート	・部活動が生徒の心身の育成に役立っているという認識をすべての教員が持っている一方、部活動と学習のバランスが課題と考える教員が3割程度、学習時間の確保を課題と考える生徒が3割程度いる。 ・交通安全指導や防災対応の取り組みは適切な頻度、内容で実施されており概ね安心感が得られている。 ・自転車、バイクによる交通事故が少なからず発生している。	B	・学習と部活動のバランスを意識し、生徒の実態や学校の体制を踏まえ、適正な部活動の実施を目指していく。　・・自転車、バイクによる交通事故が少なからず発生している状況を踏まえ、交通安全について、生徒が当事者としてより主体的に行動できるよう取り組みを強化していく。 ・防災マニュアルや避難所運営計画の内容の更新を進める。	3	・多様な行事や部活動を通じて、生徒が粘り強く挑戦する「折れない心」を育んでいると評価できるが、その両立は容易ではなく、教員の負担増も懸念されており、外部指導員の活用といった具体的・積極的な改善策が求められる。・必ずしも全員が文武両道である必要はないのではないか。・個々の生徒の状況に応じた多様な価値観の許容が重視されている。部活動の意義についても、単なる技術向上や勝敗だけでなく、「スポーツを通して何を学ぶか」や、タイムマネジメント能力を養うツールとして捉え直す視点が必要である。・時代の変化に合わせて生徒心得（校則）を見直す際、生徒を議論のプロセスに巻き込むべきである。・伝統を守りつつも、変化を恐れず、生徒が自分自身の時間を管理しながら自信を持って歩めるような、しなやかな心の育成に向けた環境づくりが求められる。
4	学校を取り巻く教育環境の整備	生徒に対する観察や声掛けを日常的に行い、いじめや体罰のない学校をめざす。 教職員の働き方改革を推進し、業務内容の見直しを図る。 業務の遂行にあたり、お互いに助け合える雰囲気づくりにつとめ、負担感の軽減を図る。	学校評価アンケート いじめ調査、体罰調査 学校評価アンケート 学校評価アンケート	・すべての教員が生徒への適切な気配りや声掛けを行い、いじめや体罰の根絶を意識し、いじめを生まない環境づくりに努めている。また、生徒評価でいじめや体罰はないという回答が8割を超えている。 ・9割以上の教員が仕事に充実感を感じており、職場の人間関係について助け合いや声掛けが適切に行われていると捉えている。	B	・スクールカウンセラーや関係機関との連携により、悩みを持つ生徒の支援に努める。 ・校務DXを推進し、業務の効率化に努めるとともに、職員のワークライフバランスの意識を高めていく。 ・施設面において、北館への冷房の設置やトイレの改修を求める声も多い。	3	・教員の労働環境改善と施設・設備の充実が急務である。特に教員の勤務時間意識の低さは「喫緊の課題」であり、業務のスリム化や無駄な事業の中止による負担軽減が強く求められる。・施設面では、北館への冷房設置やトイレの空調整備が要望されているが、これらは単なる快適性の問題ではなく、「学習環境の格差」を解消し、学力向上に繋げるための必須事項である。・生徒との関係性は良好で、日常的なコミュニケーションが安心感を生んでるが、いじめ問題への対応については、第三者を含めた組織的な意見交換などの工夫が必要である。・校則の改善については、多様性や自己表現の観点から前向きな検討を求めたい。・ハード面とソフト面の両方から生徒の主体性を支える環境づくりを進めることが期待される。